（別紙２）

審査の結果の要旨　　氏名　小林 延人

明治維新期の経済・社会状況は地域によって多様なため、諸藩や特定の地域を対象とした研究、あるいは明治初年の政府の政策の研究の蓄積にもかかわらず、全般的な理解を図ることが困難であった。本論文は明治政府が発行した大政官札と諸藩・県が発行した紙幣の流通状況に注目することで、全国的な展望を試みたものである。

第一章では政府を起点とする太政官札の流通を検討して、それが新政府による正金銀の借り上げと手形を含む銀建て通貨の使用を禁じた銀目廃止で貨幣不足に陥った京阪の両替商などによって活用され、遠隔地取引の手段となったと指摘し、第二章では大阪の両替商銭屋佐兵衛家の文書から高知藩の銀建て藩札の発行と銀目廃止後のその処理過程を検討して、両替商と藩との交渉の結果、損失が両替商より領民に多く転嫁されたことを指摘し、第三章では九州の金融の中心地であった日田の金融業者千原家の文書から明治初年の藩・県札の流通のありようを論じて特産物移出との関係や小額貨幣の不足を補う小額紙幣としての藩・県札の意味を強調し、第四章では蚕種輸出で賑わうとともに多くの贋金が流入した信州上田で、藩が藩札と交換で贋金を回収し、それによる損失を蚕種輸出藩営の利益で補おうと試みたものの蚕種輸出の不振で挫折する過程を描く。第五章では松坂屋伊藤次郎左衛門家文書などから名古屋藩が政府の輸出奨励目的の通商司政策に抵抗し、藩が主導できるようになって初めて通商会社を設けて旧来の特権商人らに太政官札や藩札の貸付けを担わせたことを指摘し、第六章では幕末維新期に最も多様な紙幣が発行された播州での紙幣の流通状況を検討して小額貨幣不足に対応して他領藩札の流通が促されたことを指摘し、第七章では群馬、埼玉両県域での紙幣回収の過程での県と政府のやりとりを描く。

以上のような、紙幣をめぐる問題が生じた代表的地域を網羅した史料に基づく検討の結果、従来その不安定性が強調され、近年は通貨供給量の増加として概括的に積極的意味が論じられていた維新期の紙幣に関して、太政官札が国内の地域間決済通貨や藩札類の兌換準備として機能し、また藩札類が小額貨幣の不足を補ったことで維新期の経済発展へ貢献し、さらには、全国的な紙幣使用の一般化を導いた状況を具体的に明らかにした。また明治初年に諸藩県が、地域的な連携も含めてかなり独自に通貨発行を中心とする経済政策を行い、特産物の流通や輸出、そして地域住民の生活がこれに左右された状況を明らかにして、地域ごとの貨幣のありかたに注目することで維新期の経済・社会状況の理解が進み、さらに江戸時代との連続性や中央集権化の意味も再検討できることを示した。検討対象が広範で、未だに実証的検討成果の含意を十分に分析しきれていない点も残るが、以上のような本論文の達成点からして、本委員会は、本論文が博士（文学）の学位を与えるに相当するものと認める。